新體

# 國語教本

文部省檢定濟

藤岡作太郎編

三

4a
810
明41

42004
教科書文庫
4
810
41-1908
20000
66902

資料室

4a
810
明41

文部省檢定濟
明治四十一年十二月廿六日　中學校國語科用

文學博士　藤岡作太郎編

# 新體國語教本

東京　開成館出版

廣島大學
教
66902
圖書



## 新體國語教本　卷三目次

一　吉野と嵐山　一
二　名所の花　六
三　賴山陽　七
四　德川時代の二大出版　一三
五　幕使大統領に謁す　一八
六　無言の使　二五
七　胡椒から印度　二八
八　臺灣ノ住民　三一

九　臺灣神社と熱田神宮　三五
一〇　曾我兄弟　その一　四〇
一一　曾我兄弟　その二　四五
一二　心の寶　五一
一三　短き寶劍　五三
一四　日本海海戰　その一　五五
一五　日本海海戰　その二　六二
一六　東郷大將の片影　六九
一七　老船長　七一
一八　アルプス越　七四







一九　後方勤務　七九
二〇　海濱より　八二
二一　叡山の夏　八五
二二　登山の益　九一
二三　山の歌　九五
二四　樺太境界劃定行　その一　九六
二五　樺太境界劃定行　その二　一〇二
二六　未知星ノ測定　一〇八
二七　田舍の生活　一一四
二八　英人の運動　一二〇

# 新體國語教本　卷三

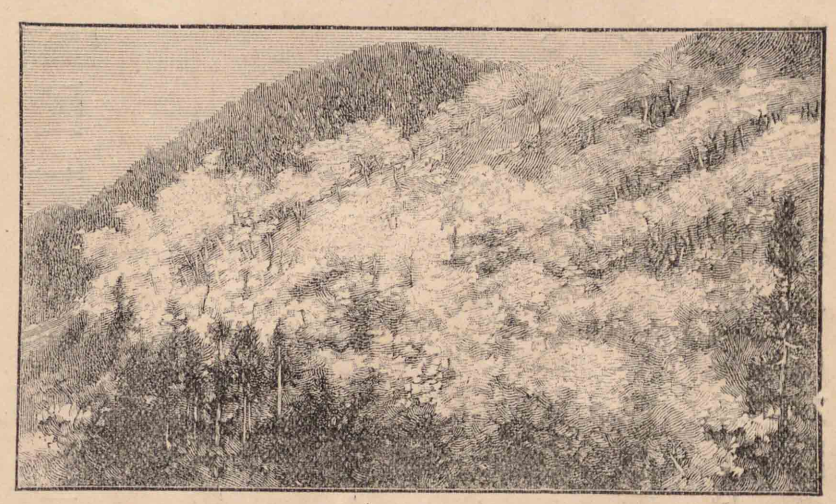
文學博士　藤岡作太郎　編

## 一　吉野と嵐山

吉野は奈良朝以前より歌にも詠まれて名高き所なるが、はじめは吉野川の清き流を賞して、水邊に離宮をも設けられしなり。香雲遙にたなびきて、日本一の花の名所といはれしは、平安朝この方なるべし。

吉野川を渡れば、六田の里あり、これより登り坂にな

開落



吉野

りて吉野山に入る。奥の院まで二里あまりの間に、櫻の多き所、下と中と上と三箇所ありて、やゝ開落の時を異にす。下の一目千本最も壯觀なり。總じて吉野は、馬の背のやうなる山の上に町ありて、そこより谷の櫻を見下すなり。花は一重の山櫻にて、赤き若葉の間





肥え。

これは〳〵とばかり花の吉野山　安原貞室

舊跡

歌書よりも軍書に悲し吉野山　東花坊支考

春の花と散りけん

に、やさしく痩せて咲く。肥えて派手なる姿はなけれど、千朶萬朶、山一杯に咲き滿ちたる樣を望めば、古人が、これは〳〵とばかりに驚きしも理なりと頷かる。」

吉野の花盛を賞めたる詩歌は數へもつくされねど、この山はまた歷史上の舊跡として遊人の心を動かし、歌書よりも軍書に悲しといはれたり。大海人皇子がこゝに潛みたまひしを始として、義經主從は嶺の白雪に踏み迷ひ、大塔宮の軍敗れて、村上義光父子は春の花と散りぬ。その後南朝の皇居として、至尊が山里の御起臥いかに心苦しくましく〳〵けん。山寺に春

古陵松柏吼天飈　山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時輟帚、落花深處說南朝
藤井竹外

を尋ぬれば春寂寥、老僧時に帚の手を輟めて、落花深き處に故事を語るもあはれにこそ。

見え。

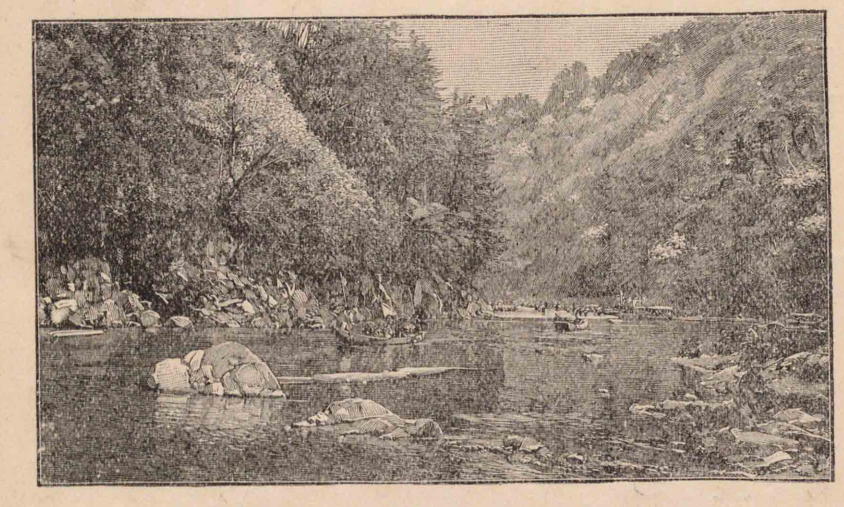
吉野の花に惜しむべきは、水の眺のなき事なり。吉野川程近く麓を走れども、花の山より川は見えず、水の邊に花はなし。隅田河畔の向島は花と水と長く相沿ひたれど山を見ず。花と山水と共に備れるは嵐山なり。保津の流深く山を劈きて、丹波より山城に入る、その峽間の將に開けんとする處にこの山あり。山は覆ひて淵に墜ちんとし、水は衝いて麓を穿たんとす。赤松の翠いやが上にしげりたる中に、花の雲、紅葉の錦、

將に開けんとす

いやが上に



ならざるはなし



畫よりも美しく、夏のすゞみにも宜しく、雪の降りたるは尙更面白く、四季の景色いつとして佳ならざるはなし。

嵐山

嵐山の櫻も吉野の種なり。平安朝にも、既にこの地は類なき勝地として知られしが、その頃はなほ秋の紅葉ばかりを賞したりしに、

山

植ゑ。

後嵯峨天皇の嵯峨に離宮を設けたまふに及びて、そこより眺めんが爲に、吉野の櫻を對岸の嵐山に移し植ゑさせたまひしなり。その離宮は後に禪寺に變りぬ、天龍寺これなり。

## 二　名所の花

短歌二首

大堰川、月と花とのおぼろ夜に
ひとりかすまぬ浪の音かな。　（小澤蘆庵）

吉野山、霞の奥は知られねども、
見ゆるかぎりは櫻なりけり。　（八田知紀）

今樣一首

花よりあくるみ吉野の
春のあけぼの見わたせば、
もろこし人もこま人も
やまと心になりぬべし。　（賴山陽）

なりけり

なりぬべし

## 三　賴山陽

賴山陽は廣島藩の儒士賴春水の長子なり。年漸く長じて大志あり、父の職を襲いで、その國に老いんこと

襲いで老い。

呼ばれなば

を欲せず。謂へらく、主公の恩重からぬにあられど、強ひて不得手の奉公をせずとも、學業を勵みて名を世に顯し、末代までも藝州の某と呼ばれなば、また報恩の一端たるべしと。

頼山陽

備後の儒士菅茶山その才を愛し、請うて家塾を掌らしめしかど、また久しくその地に留らず、遂に意を決して京に





畢生

松平定信

機嫌

出づ。その後久しからずして詩文の譽大いに揚り、天下また賴山陽の名を知らざるものなきに至れり。

山陽幼より歴史に耽り、古今の治亂を論ずることを好む、その畢生の事業は日本外史の著述なりき。この書成りしかば、松平樂翁禮を厚くしてこれを求む、求に應じてこれを獻りしに、褒賞淺からず。山陽書をその侍臣に寄せて、謝して曰く、

御狀拜見仕候。御上益、御機嫌よく被爲在、奉恐悦候。貴公樣愈、御安健にて御勤仕なされ、珍重に奉存候。然れば先だつて被仰遣候拙著外史ほゞ思召に相

會釋

加之

感佩

協ひ候につき、御會釋として御纂輯の集古十種全部二函、加之白銀二十枚御恩賜被仰付、存じよらざる榮耀、永く家藏として子孫に貽し可申、誠恐感戴仕候。誠に數十年心力を盡し候義、有識の鉅公の寓目を得候だに、辱き次第に奉存候に、圖らずも更にこの賜を辱くし候段、本意至極に奉存候。早速國元の老母などへも申遣はし、一同感佩仕候事に御座候。亡父在世に候はば、如何程か相喜び可申、これまた設位祝告仕候。これらの趣、乍恐可然御取成被下候樣、奉願上候。集古は未だ詳覽を得ず、猶追々可申上、御謝詞迄、如此に御座候。恐惶謹言。

危篤

卽則

繼續

山陽さきに父母の意に戻りて藩を脫したりしかば、心中常に安からず、早く兩親が滿足の顏を見んことを望んで止まざりき。父の危篤の報到れる時、折ふし生徒を集めて莊子を講ぜしが、卽ち卷を投じて立ち、夜を日に繼いで鄉里に歸りしかども、既に春水は歿しぬ。山陽深くこれを遺憾とし、生涯また莊子を講ぜざりきといふ。されば、せめてひとり殘れる母の心を慰めんと欲し、これを京都に迎へたること四度、從ひて吉野に遊べること二度、母の喜を見て、己もまた喜

則、卽

雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮、萬里泊舟天草洋、煙橫篷窓日漸沒、瞥見大魚波間跳、太白當船明似月

名を……博し

べり。

山陽旅行を好み、行けば則ち詩あり。嘗て九州に遊びし時、天草洋に泊して賦したる、雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮の詩の如き、盛んに世に傳誦せらる。耶馬溪の奇勝も亦その才筆によつて名を天下に博せしなり。

## 四　徳川時代の二大出版

明治文化のめざましき進歩は活版事業の發達に依ること多し。今日の盛大には比すべくもあらざれど、

伴なうて

慶長元年は二二五六年

徳川時代の文運も亦圖書の刊行に伴なうて榮えしなり。印刷のことは、慶長以前にもありしが、甚だ稀なりき。家康海内を一統するに及びて、典籍を蒐集し、その重要なるものを出版せしむ。民間にもこれに倣ふもの多く、これより文藝は次第に盛んになりぬ。上下三百年、版本の數無量なるが中に、最も浩瀚なるを黄檗版大藏經と群書類從とす。

倣、習

文藝

浩瀚

第四代の將軍は家綱

普及

大藏經の開版は鐵眼の獨力に成れり。鐵眼は黄檗宗の僧、大阪瑞龍寺の開山にして、徳川氏第四代の將軍の頃の人なり。大藏經の世に普及せざるを慨きて、そ

上梓　の上梓を思ひ立ち、四方に勸進して淨財を募り、經營

素志　刻苦、遂に素志を遂げたり。卷數すべて六千七百七十

一、その版傳へて

黃檗山萬福寺は京都の近郊にあり

今に黃檗山内に存す。鐵眼また飢饉の際に當りて、救濟を謀り、その恩惠を蒙るもの一萬餘人に及べりといふ。

鐵眼と保己一



編纂　群書類從は塙檢校の編纂せる叢書なり。檢校名は保

叢書　己一、武藏の農家に生まる。幼にして明を失ひ、江戸に

出で、雨富檢校の門に入りて、その家に寓す。されど生

來の無器用にて、三絃を學べど調子も合はず、鍼術を

習ふ　習へど成功の程も覺束なし。望を失ひて牛淵に身を

投げんとせしが、ふと思ひかへし、死ぬる覺悟にて働

かば、如何なる業か成らざらんとて、立歸りぬ。その師

も曰く、「汝志を立てて鄕里を出でたれど、一つも修め

得たることなし、朝夕汝が爲すところ、またわが心に

合はず。されど門人を育つるは師の職分なり、今より

育つ

肝に銘じ
從事
古典
盲人
輙（卽、乃、則）

三年が間汝を養ふべし。その間に自ら好むところを勵みて、その器を磨くべし。」と教へしかば、保己一肝に銘じて、これより一心に學問に從事せり。

保己一萩原宗固に就いて、古典と和歌とを學ぶ。横田茂語も同門の人なり、宗固二人に告げて曰く、「汝等學問に忠實なること常人に過ぎたり。されど人は才の向ふところに一途ならずば、大成を期し難し。茂語は和歌を專らにし、保己一は讀書を旨とせよ」と。これを聞くもの盲人に讀書を勸むるを怪しみしが、後に至りてその鑑識に服せり。保己一一事を聞けば輙ち諳



わら。（笑）うて
おぎな。（補）ふ。
篤學

誦し、博聞にして見識あり。嘗て夜間書を講ぜしに、室内に風吹き入りて燈を消す。聽講の人、暫く講を停めて點火を待たんと、請ふ。保己一笑うて、「目のあきたる人は不自由なるものかな。」といへりとぞ。

水戸の士立原萬その學識に服し、これを藩侯に勸めて、大日本史の校正に與らしむ。同僚その盲人を入るるを誹る。萬肯んぜずしていふ、「盲は身の病にして、心の病にあらず。塙は篤學の士なり、いかでかその身の不具を以て、これを棄つべき。もし國史の校正に與りて補ふ所なくば、萬その罪を蒙るべし」と。これより保

己一の名世に顯る。

湮滅

保己一壯年より古書の湮滅を憂へて、叢書編成の志あり。寛政五年、幕府に請ひて、和學講談所を建て、既に集めたる書を選擇類別して群書類從を校刻す。文政二年に至りて全部六百六十五册成る、志を起してより、實に四十一年を經たり。續集千百八十五册は刻成らずして、保己一歿しぬ。

寛政五年は二四五三年

選擇

文政二年は二四七九年

## 五　幕使大統領に謁す

萬延元年（二八六〇）の事

閏三月廿八日、陰。大統領に謁見する日なれば、今日をはれと支度し、豐前守正興狩衣、おのれ同じく、その他それ〴〵の裝束して正興には、ジュポント、おのれにはリー、各、附き添ひて、四馬の車に乘り、その覆ひを後ろへはねたり。

新見正興

おのれ

おほ（覆）ひ。

客舍を出づれば、先に鼠色の羅紗の筒袖着たるもの二十人ばかり立ち並び、次に樂人三十人、騎兵五六騎、次に御國書入の長持、赤き革覆ひ掛けたるを枠に入れて舁がせ、次に正興、おのれ、下司まで順々車に乘りつれたり。大路は所せきまで、物見の車、步行の男女群集す。狩衣は海外には見も慣れぬ服なれば、彼等はい

客舍

所せきまで

おろか
をかし

とあやしみて見るさまなり。おのれはかゝる國に來て、御國の光を輝かしし心地し、おろかなる身の程も忘れて、誇り貌に行くもをかし。

やがて大統領の居所にて、鐵の柵門あり。入りて七十間ばかりも行けば、堂の前なり。騎兵、歩兵、わ



玻璃
むかう

が供人等はこの所まで至る。車より下りて、直に石の階段を登り、ひと間、ふた間を過ぎて、控所に入る。おのれ等が席は楕圓の形にして、七間に四間もあるべし。花やかなる藍もて文を出しし敷物あり。三方は玻璃の障子にして、内は帳を掛く、これも同じ色の織物なり。四方に大いなる玻璃鏡を掲げ、前に卓を置きて、わが國の蒔繪の硯箱、その他さまゞ飾りてあり、これはペルリ渡來の時贈られしものと聞く。やがて謁見の席に案内せらる。成瀨正典御國書を持ちたり。席の入口に至れば、兩開き戸をあけたり。むかうへ五

御諚

六間、横十二三間もあるべき席の正面に、大統領ブカナン、左右に文武の官人夥しく、後ろには婦人あまた、老いたるも若きも美服を飾りて充満したり。正興、おのれ等一同に席に入り、一禮して中央に至り、又一禮して大統領の前に近く進み、御諚の趣たからかに述ぶれば、名村五八郎通辯す。成瀬正典御國書を持ち出しければ、正興御書とり出し、大統領に手渡しにしたり。これにて禮を述べて、控所に退けば、ジュボント來りて、わが國の禮は右にて濟みしかと問ふ故、濟みたりと答ふ。又來られよと云ふまゝ、一同に出づれば、大統

訪問

はた

挨拶

訪問

領手をとりて、日本鎖國以來はじめて和親を結び、まづ合衆國へ使節を立てられし事、大統領は更なり、國中の人民歡喜限なき由、はた厚き御諚の趣、御國書賜はりし事ども、殊更に忝き由を述べ、口述の横文を渡しけり。高官の人々五六輩も手をとりて挨拶すれど、限なければ、余等は一禮して席を出で、さきの通りの列にて旅舍に歸りたり。

外國公使を訪ふは普通の例なりと聞きて、夕四時に和親の國々の公使の家を回る。旅服になりて、馬車一二輛にうち乘り、その家の前に至れば、名札を御者に

輕便

威嚴

肩章

もたせて、取次に渡すのみなれば、車を下らずして濟みぬ、これは輕便の事なり。數軒なれどとく走り、誰の家なるかも知らずして過ぎける中に、英蘭の公使の家だけは、通りて面會せしが、いと美麗なる家にて、公使は妻子と共に出でありたり。

かくて夕方たち歸り、うち寄りて今日の有樣を語る。大統領は七十前後の老翁、溫和にして威嚴もあり。されど商人にも同じく、黑羅紗の筒袖、股引にて、何の飾もなく、太刀もなし。高官の人々とても、文官は皆同じ。武官は肩章を付け、袖に金筋あり、太刀を佩びたり。かる席に婦人のあまた裝ひて出づるも奇なり。さてこの度の御使は、かれも殊更に悅びて、今日の狩衣の樣など、新聞紙に寫して出しし由なり。はじめて異域の御使に、事ゆゑなく仰せごとを傳へけるは、實に男子に生まれ得しかひありて、うれしさ限なし。

事ゆゑなく。

（村垣範正）

## 六　無言の使

昔は謎を解くことを大いなる智慧として重んじたりと見え、古史には謎の話多し。波斯王ダリヤスが、スシヂア人と戰ひ、大軍を率ゐてその國に侵入し、互に

率ゐ。

對陣せし時、敵軍より使來りて、一羽の鳥、一頭の鼷鼠、一匹の蛙、及び矢一筋を齎せり。その使は鄭重に、「某は國人の命に依つてこの四品を齎し來れり。使命はこの中に籠れり、他に述ぶべき辭なし。」とて、そのまゝに辭し去れり。

鄭重

こゝに於て波斯の軍中にては、この謎を解くこと一大問題となりしが、ダリヤス王は、まづ喜んで之を解いて曰く、「鳥は天を翔るもの、鼷鼠は地に棲むもの、蛙は水を潛るもの、矢は兵器を代表す。然れば朕の武威に恐れて、他の列國の服從する如く、この國人もその

こゝに於て

解いて。

然れば。



天と地と川と兵器とを捧げて、我に降を乞ふものなり」と。然るに王の參謀ゴブリヤスは之を非として、諫めて曰ひけるは、「これ降を乞ふにあらず、却つて大膽なる敵意を表するものなり。鳥の如く翼ありて空を飛び、鼷鼠の如く地を掘りて隱れ、蛙の如く水を潛りて遁るゝに非ずんば、わがこの矢の爲に、汝等は絶命すべしとの意味なり。今囘の戰は最も御方の注意を要す。」と解きしが、果してスシヂア人は勇敢なる戰を開きて、波斯軍を破れり。

然るに。

意味

（矢野文雄）

## 七　胡椒から印度

印度は今日英國に取りては非常に重要なる領地なるが、その初、英人は如何にしてこの大帝國を領する緒を開きしかを尋ぬれば、小粒の胡椒がその原因なりといふ、また奇ならずや。

緒を開き

奇ならずや

十六世紀の終ごろ、印度の貿易を占有せしものは和蘭人に限りたり。而して蘭人が專ら倫敦の商人に賣込みし品は印度産の胡椒にして、英商はすべて蘭人の受賣をなしたりしなり。その賣買の價は、もとは一封度につき三志なりき。然るに蘭商は更にその利益を多くせんとて、俄に之を六志に上げ、なほ引續きて八志まで引上げたり。

抗議

こゝに於て一五九九年九月廿二日、倫敦の商人は集會を催し、この價あげに對して抗議すべき事を決し、且かく勝手の價あげを受くるは、畢竟蘭人に印度の貿易權を獨占せらるゝ爲なれば、以後は一會社を組織し、自ら印度地方に貿易を開き、直輸入をなして、胡椒の價を下ぐべしとの相談をなし、この事を政府に申し立てたり。

組織

相談

直接　競うて　創立　頻繁

その時は恰も女皇エリザベスの在位中にして、女皇は直に之を許可し、印度のモゴール帝に對して、直接貿易を開くべき使節を遣はすことに定められたり。かくして貿易の道は開け、英商も始めて蘭人と競うて東航を企つるに至り、かの有名なるジョン"コンパニー"といへる會社は創立せられ、第一回より第十二回までの航海にて、その資本に對して、十二割の利益を得たり。

これぞ英人が印度にその力を注ぎたる始なる。これより交通貿易ともに頻繁となり、蘭人、佛人、及び葡人

蠶食　恢復

を逐ひて、その利益を奪ひ、漸次に印度を蠶食し、遂に今日の大帝國を建設するに至れるなり。（矢野文雄）

## 八　臺灣ノ住民

臺灣ノ歴史ヲ尋ヌルニ、十七世紀ノ初、西洋ニオケル航海術ノ進歩ニ伴ナヒテ、世界交通ノ道漸ク開ケタル時、おらんだ人來ツテ澎湖島ヲ占メ、更ニ進ンデ本島ヲ領シタリ。ソノ後、明ノ遺臣鄭成功コレヲ逐ヒテ、コノ地ニ據リ、明朝ノ恢復ヲ計リシガ、事成ラズ、臺灣ハ清國ノ有ニ歸シ、明治廿七八年ノ戰役ニヨリテ、マ

版圖

タワガ版圖ニ入リタリ。

ワガ國ニ割讓セラレシ以前ヨリ臺灣ニ住メル人民ハ、大別シテ二トスベシ。一ハ上古ヨリコヽニ居リテ、

程度

知識ノ程度極メテ低キ土人ニシテ、一ハ大陸ヨリ移住シタル支那人ナリ。土人ノウチ、清國ニ歸順シテソ

管轄

ノ管轄ノ下ニアリシモノヲ熟蕃トイヒ、山谷ノ間ニ棲ミテ支那人ト交通セザリシモノヲ生蕃トイフ。

支那人ノ多ク移住セルハ、明末ノ亂ニ流民ノ遁レ來レルニ始リ、ソレヨリ漸々ソノ數ヲ增シテ、前後三百年ノ間、全島ノ人口ノ大部ヲ占メタリ。カレラノ來ル





遲シクセシ

已ム

ヤ、土人ノ地ヲ奪ヒ、狡智ニ任セテ欺瞞ヲ逞シクセシカバ、生蕃ハ已ムヲ得ズ遠ク走リテ山間ニ蟄シ、怨憤ノ念骨髓ニ徹レリ。

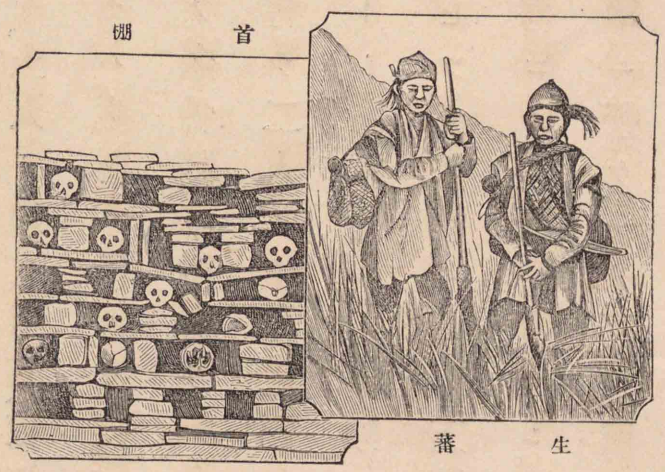
己。

嘗テ二人ノ生蕃三個ノ銀貨ヲ得テ、コレヲ平分セントシ、路ニ坐シ、首ヲ傾ケテ考フレドモ、ソノ方法ヲ思ヒツカズ。偶、一人ノ支那人來カヽリテ、ソノ故ヲ問ヒ、「吾コノ問題ヲ解カン。」ト言ヒツヽ、三個ノ一ヲ取ツテ甲ニ授ケ、一ヲ乙ニ與ヘ、殘レル一ヲ己ノ懷ニ納メテ去レリトイフ。コレ實ニ支那人ト生蕃トノ智愚ヲ穿チ得タル談ナリ。

樸野

賠償

元來、生蕃ハ愚直ニシテ樸野、山野ヲサマヨヒ、鳥獸ヲ狩リ、定マレル家ナク、明日ノ計ヲ思ハズ。鬪爭ヲ好ミテ、屢、深林ノ中ニテ他ノ蕃族ト鬪ヒ、死傷者ノ多キ方ヲ負トシ、敗者ヨリ賠償ヲ爲サシメテ和解ス。又人ヲ殺シテソノ首級ヲ獲ルヲ喜ブ奇習アリ。コレ蓋シ支那人ニ對シテソノ肉ヲモ啖ハントスル憎惡ト、自己ノ勇武ヲ示サント








スル名譽心ト、相依リテ生ジタルナラン。首級ヲ獲ルコト多キモノホド、蕃族ノ間ニ敬ハレ、酋長ノ家ノ如キ、或ハ室内ニ、或ハ屋外ニ、髑髏ヲ懸ケ列ネタルガ、煙ニ煤ケ、雨ニ打タレタル樣、物凄シトイフモ愚ナリ。

イフモ愚ナリ

## 九　臺灣神社と熱田神宮

臺灣に遊ぶものは、まづ臺北の北郊に鎭座ましますまう(詣)でよ。臺灣神社に詣でよ。これは北白川宮能久親王の御靈を祀りたる御社にして、この島の鎭守と申すべし。

そも〳〵

そも〳〵臺灣のわが版圖に入りし後、なほ支那人の

かうむ（蒙）り

露營

物ともし

この地に據りて背叛するもの多かりしかば、明治廿八年、北白川宮勅を蒙り、近衞師團の精兵を率ゐて、征討に向ひたまへり。はるゞと海を渡りて、晝は汗馬に鞭うち、夜は露營に夢安からず、ある時は土甘藷の燒きたるをめし上り、ある時は晝食の辨當に梅干二粒を菜として、うましと宣ひ、士卒と辛苦を共にして、雨風をも山河の險をも物ともしたまはざりき。

痛ましいかな、進軍の間に病に罹りたまひぬ。將士齊しく歸京を勸め奉れども、「たとひ身はこの地の土となるとも、征討の功成らずば、いかでか歸るべき。」とて

薨去

由來

をろち（大蛇）を（尾）

許したまはず。賊徒の鎭定殆ど成りて、その年十月十二日薨去あり。天皇深くこれを悲しみたまひ、國民も擧つてこれを悼み奉りき。

北白川宮の御事蹟を語るにつけて思ひ出でらるゝは、熱田神宮の由來なり。神宮は草薙劍を神體として、日本武尊を祀り、併せて素戔嗚尊等を祀り奉れり。

草薙劍ははじめ叢雲劍といへり。神代の昔、素戔嗚尊が出雲の簸の川上にて八岐の大蛇を斬りて、その尾の中より得たまひし寶劍にして、その大蛇の居たる處には雲たち上れる故に、叢雲と名づけしなりとぞ。

模造

をば（叔母）

尊これを天照大御神に奉り、大御神更に三種の神器の一として瓊々杵尊に授けたまひき。崇神天皇の御代に、鏡劍を大和の笠縫邑に置き、別に模造の品を八尺瓊曲玉と共に宮中に留めたまひき。その後、寶劍は御鏡と共に移されて、伊勢の神宮にありき。

景行天皇の御子日本武尊熊襲を平げ、歸りてのち幾ほどもなく、また父の帝の詔を承けて、東夷を征討したまひき。途に伊勢の神宮に詣で、この御神に事へたまへる叔母君倭姫命に御暇乞ありしかば、叔母君これを勵まして、寶劍を授けたまひき。

お（生）ひ。

申し。し

尊は進みて駿河國に至りたまひしに、そこなる夷欺きて野の中に誘ひ入れ、火を草につけたり。いやが上に生ひしげれる叢見る〳〵燃えわたりて、尊の御身も危からんとす。尊かの劍にて草を薙ぎ拂ひて難を逃れ、やがて夷を滅したまひき。この時より寶劍を草薙とは申しなり。

その後、尊は陸奥の夷を征し、また甲斐、信濃に越え、或は海上に漂ひ、或は險阻に勞れ、樣々の困難を凌ぎたまへり。一時還りて尾張に居たまひしが、また近江に出立ち、そこにて病にかゝりて、伊勢の能褒野に薨し

おはせし

金枝玉葉

おそれ（畏）

たまひぬ。尾張におはせし妃宮簀媛寶劍を奉じて神祠を建てたまひき、これぞ熱田神宮なる。

あゝ昔と今と時は異なれども、いづれも金枝玉葉の御身を以て、國事に力を盡して、遂に邊鄙の地にうせたまひしこと、まことに畏多き限ならずや。されど御身こそ空しくなりたまひけれ、御靈はとこしなへにわが國の御護なり。

## 一〇　曾我兄弟　その一

平家世ざかりの頃、前兵衛佐頼朝は、久しく伊豆國に

相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野の八箇國

鋒を向け

一二を下らぬ

安元二年は一八三六年

歸るさ

流され居たりしが、一旦志を立てては、龍の天に升るが如く、忽ち海内を一統しけり。關東八箇國の侍の、これに從うて功ありしものは、分に應じて立身出世し、鋒を向けし輩は家も領地も失ひしが多かる中に、伊東の一門が運の末こそ哀なりけれ。

伊東祐親入道は、伊豆國にて一二を下らぬ侍なり。嫡子河津三郎祐泰も武勇の譽高かりしが、安元二年十月、奥野の狩の歸るさに、一族工藤左衛門尉祐經に殺されぬ。祐親は頼朝に敵對し、いけどりとなりて、遂に自害して果てぬ。祐泰の子一萬は父の殺されし時五

世を狹め
あるにかひなく
折節

歳、筥王は三歳にして、母と共に相模の曾我太郎が許に引取られしが、謀叛人の伊東が孫よと、人の指さすも恥づかしく、われから世を狹めて、あるにかひなくくらしけり。

年たけ物を覺ゆるにつけて、兄弟は父のことのみ忘るゝ隙もなし。一萬が九つ、筥王が七つの年なりけり、九月十三夜の空には雲の影もなきに、兄弟は庭に出でて遊びけるが、折節五つ連れたる雁の、月を渡りて過ぎてゆく。「あれ御覽ぜよ。五つある一つは父、一つは母、三つは子供。われら兄弟には、母はあれども、父は何



涙の種
をさな(幼)き
ものを

處にましますぞ。」と見る物ごとに涙の種となる。「われらより幼きものも、世間の人は、馬に乘り、物を射ることの羨ましさよ。われらも父だにましまさば、笠懸、犬追物、心のまゝに習ふべきに。」と兄がいへば、「父のましまさば、わが弓の弦(つる)くひ切りし鼠の首射て賜はらんものを、腹だちや。」と弟のいふ。兄聞きて、「その鼠よりも憎きものこそあれ。」「誰ならん、わが竹馬こはしたるものか。」「いや〳〵、父を討ちしものの憎きに、われら早く二十にもなれよ、討ちて恨をはらさん。」「その親の敵の頸の骨は石よりも堅きか。」など語り合ひ、兄弟はいつ

あかしくらし
菩提
ひたすら

の日か本望遂ぐべきと、その事のみ指折り數へて、あかしくらしけり。

月日の足はしばらくも留らず、一萬は元服して曾我十郎祐成と名のる。弟は法師になして、父の菩提を弔はせんと、母の箱根山に上せて、權現の別當に預け置きしに、筥王ひたすら出家を嫌ひて、山を逃れ出で、これも元服して五郎時致と名のる。兄のあるところには弟もあり、弟の行けば兄も行く、一つの喜も半ばづつ喜び、同じ歎も共に歎く。敵にあふとも一人して討つな、冥土の旅も一所ぞと、固く契りて、兄弟はよき折を覗ひけり。

建久四年は一八五三年
遭へり。
缺けたり。見つ。
遠ざかりぬ。
送りけり。

## 一一　曾我兄弟　その二

建久四年五月、將軍頼朝富士の裾野に卷狩し、諸國の大小名これに從へり。曾我兄弟も御伴にまぎれて來りけるが、工藤に遭へりと思へば、折しも兄弟の一人は缺けたり、また見つと思ふうちに、矢頃は遠ざかりぬ。障ることのみ多くして、空しく日頃を送りけり。御狩もやがて終るべし、今宵を期せずしては、何時をか待つべきと、兄弟は思ひ定めしが、後に殘りたまはん

目もくれ、心も消え

参らせし

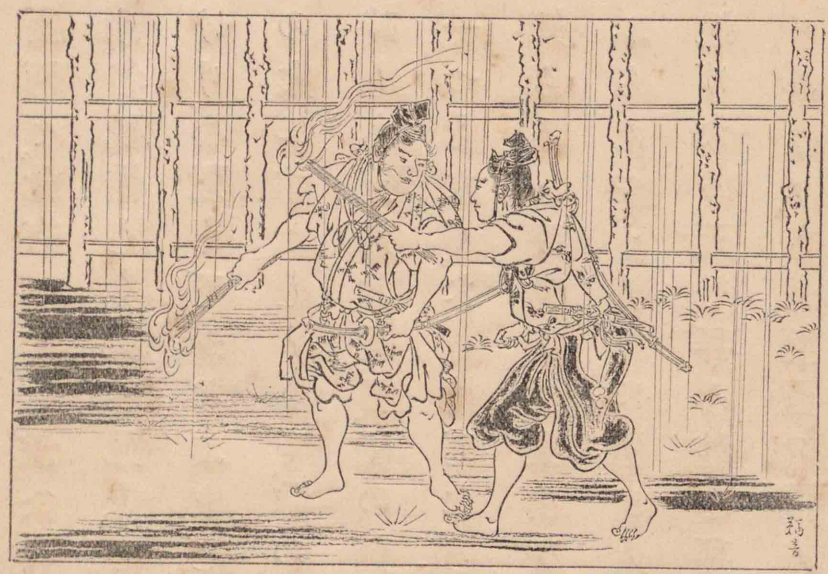
顧みがちに

母上の御いたはしさよと思ふに、目もくれ、心も消えぬ。せめてはと、名殘の手紙に形見の品々を添へて、從へ來りし鬼王、道三郎を返しやる。二人は押返して、「共に死ねとは仰せられずして、かひなき使を蒙り候ふよ。幼き御頃より附きそひ參らせし主の最期にも會はず、おめ〳〵と歸らるべきか、唯御伴仕るべし。」と申す。「汝等共に死なば、誰か母上に兄弟の志を傳ふべき。しひて聽かずといはば、永く主從の緣を切るべし。」と兄弟のいふに、今はいかゞせんと、二人は品々を携へて、顧みがちに出で去りけり。



いざや

あるまじ



これにて心殘すこともなし、夜も更けぬ、いざやとて、十郎は群千鳥の直垂の袖を結びて、りゝしく肩にかけ、五郎は蝶々の模樣染めたる直垂の袖を結びて、同じく肩にかけ、松明ふりてぞ立ち出づる。「待て、しばし。敵にあひては、しばらくの隙もあるまじ、今が最期の

對面ぞ。此方へ向き候へ、時致。」「この世の見參これかぎり、名殘惜しく候ふ、兄上」と、兄弟はしばし涙にむせびけり。心弱くてかなふまじと、二人は心とり直し、松明の火にすかし〳〵て、敵の館に覗ひよる。

時しも五月廿八日、子の刻ばかり、五月雨の空は星影一つもなく、たき捨てたる篝はしめりて燃えず、聲に知らるゝ時鳥は、足柄山をおろし來て、清見が關に向ふらん。やう〳〵に忍び入りて、十八年の本懷は今ぞ遂げたる。天を拜み地を拜む兄弟の喜、思ひやられけり。「やあ〳〵、伊豆國の住人伊東祐親が孫曾我十郎祐

（惜）しく
子の刻は午前零時
本懷
（拜）み



成、同じき五郎時致が、父の敵工藤左衞門尉祐經を討つて罷り出づ。われと思はんものは出で合ひ候へ。」と高らかに呼ばはつたり。ずは事こそ起りたれと、狩場の館は上を下へと騷ぎ立つ。折ふし小やみし五月雨の、また降りしきり、雷さへも鳴りはためきぬ。出で合ふあまたの侍も、只二人の兄弟に切り立てらるゝばかりなり。二人も鬼神にあらねば、十郎は新田四郎忠常に討たれぬ。五郎は奥深く走り入るところに、五郎丸といふもの、物陰よりかけ出でて抱きとめ、四五人その上に折り重なりて搦めとりけり。

われと思はん
（小）やみし
（折）り

狩野宗茂
新開實光

遠く。ば。近け。れば。

さん候ふ

ばや

廿九日の朝、頼朝の前に五郎を召し出し、狩野介、新開荒次郎仰を傳へて、夜討の次第を尋ね問ふ。五郎眼を怒らせて、「御前遠くばさもあるべし、近ければ直に言上すべし。退けや、方々。」とて、幼き頃よりの存念の程、一一に申し述ぶ。「さらば吾をもねらひしか。」と頼朝の尋ぬれば、「さん候ふ、父の敵討つまでは、それのみに心を碎きしが、本望遂げて後は、祖父入道の恨なきにもあらねば、千萬人の侍よりも、君一人を心がけ奉り候ふ。」と申す。頼朝舌をまき、さても勇ましき侍かな、助けばやと、思ひけれども、祐經の子犬房丸の願によりて、せん方なく五郎を斬らしめぬ。この時十郎は廿二歳、五郎は廿歳ときこえけり。

## 一二　心の寶

人の寶は廉潔に勝れるはなし。支那春秋の時に、宋の國に、司城子罕といふ人ありき。ある人より美しき玉を贈られたるを受けざりければ、かの人「これは、玉人に見せしに、よき玉なりといひしが故に、贈るなり。」といふ。子罕答へて、「吾は貪らざるを以て寶とし、汝は玉を以て寶とす。汝、今汝の寶を以て吾に贈り、吾亦わが

贈（送）

貪。（貧。）

かれこれ

いひきとぞ

擧（揚）

寶を捨てて、汝の玉を受くる時は、かれこれ互に寶を失ふことなれば、然せんよりは與へず取らずして、各、その寶を有する方まさるべし。」といひきとぞ。子罕の玉を受けざりしは、その最もすぐれたる寶を失はざらんが爲なりしなり。

また後漢の代に、楊震といふ人ありき。東萊郡の太守となりて、任所に赴けり。途に昌邑といふ所あり、その令は王密とて、さきに震に擧げられたる人なり。されば夜に入りて、金十斤を懷にし、震の旅宿に往きて、これを贈らんとせり。震辭して、「吾は君を知れるに、君の



いかにぞ

行を二にす

ダマスカスはアジアトルコの地中海沿岸の地

吾を知らざるはいかにぞ。」といひければ、「これを受け給ふとも、夜中なれば他に知る人なかるべし。」とて、また勸めたり。震また答へて、「夜中なれども、天も知るべく、地も知るべく、われも知り、君も知れり、然るを何によりてか知る者なしとはいふぞ。」とて、否みて受けざりき。面前に見る人なしとも、明暗を以て行を二にすべからざるなり。

（那珂通高）

## 一三　短き寶劍

昔、ダマスカスよりアラビヤ王に一振の寶劍を獻上

せしことありき。王氷の如きその刃を見て、深くこれを賞せしに、廷臣のうちに「この劍は實に名刀なれども、但憾むらくはその寸短し。」といふものあり。太子側に在りて曰く、「好し、勇氣を以て一歩を前めよ。然るときはこの劍の短きを補ひ得ん」と、群臣皆感歎したりき。太子のこの一言は有名なる語として傳れり。明治卅七八年戰役における旅順攻擊の如きも、その攻具より論ずれば、十分なりといふべからず。然るにわが兵の勇武は、能くこの不足を補ひ得て、遂にこれを攻め落せり。誰か「勇武は兵器の不足を補ふ。」の諺を信な

憾むらくは

擊（繫、繁）

おぎな（補）ひ。

おぎな（補）ふ。



らずといふや。

## 一四　日本海海戰　その一

（矢野文雄）

副直將校が宙を飛んで駈け來り、『敵の艦隊見ゆ。』との無線電信がありました。」と告げたるは、時計を見れば、正に午前五時十五分なり。この時早くも出港用意の信號、旗艦の檣頭に揭げられしかば、何人も待ちに待ちたる敵艦と出會ふ事とて、平生には思ひもよらぬほど、熱心にして迅速なる動作を以て、各分擔の事業に當り、用意は瞬くうちに整ひたり。

朝日艦の副長東郷吉太郎氏の手に成る

宙を飛んで

旗艦

分擔

とゝの（整）ひ。

さなきだに
彌增に
と丶の。(整)へ。
時々刻々
機會

見渡せば、各艦の黑煙天に冲し、さなきだに威風凛々たるわが艦隊は、彌增に偉觀を呈して、意氣既に露國艦隊を呑む。已にして旗艦三笠を先登とし、敷島、富士、朝日、春日、日進の順序を以て、わが隊は陣形を整へ、あら浪を蹴て對馬海峽の東水道に向ひたり。かくて進み行く程に、和泉よりの無線電信は、時々刻々、敵の陣形と針路とを報告し來りしかば、千載一遇の時は來れりと、諸士勇みて豪氣日頃に百倍せり。

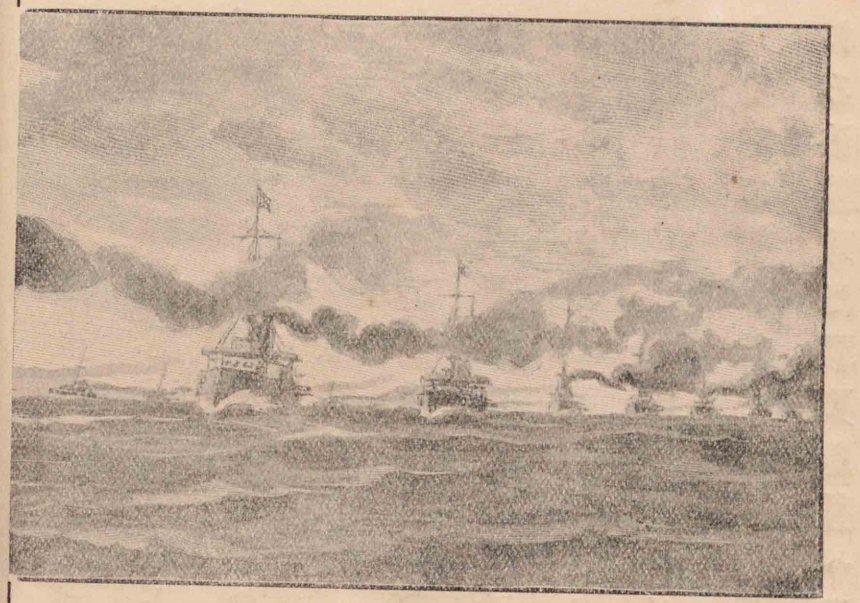
折節南西の風烈しく、怒濤舷側を嚙んで、艦の動搖甚だし。されば開戰の機會の目前に近づけるを悅ぶと

展望
避難所
整へ、整ひ

共に、又風波の靜かならんことを祈りしが、時も時、濛氣四方を鎖して、五海里以上は展望する能はざるに至りぬ。かくて程なく對馬の北方を過ぎしが、尙風波の靜まる樣子なければ、水雷艇隊に艦隊を離るべき命あり、よつて同隊は避難所に向ひて航し去りぬ。

午後一時三十六分、敵の艦隊を冲の島の西方に見る。ロゼストウェンスキー長官の坐乘せる旗艦スワロフを先登として、アレキサンダー三世、ボロヂノ、その他九隻之に續き、餘は濛氣の爲に見ること能はず。堂々たる敵艦隊は戰列を整へ、鼠色の船體に淡黃色の煙

## 舳艫相啣み　匹敵



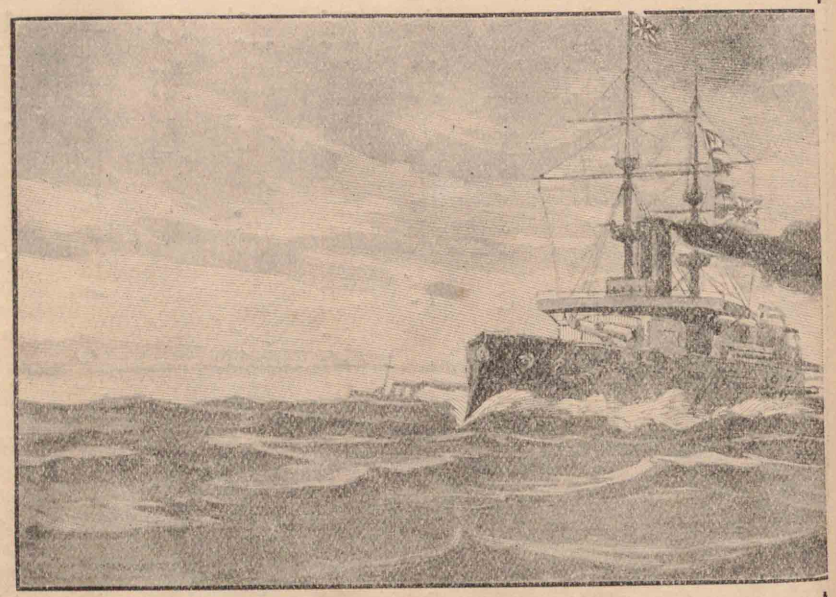
突は一層その形狀を鮮明ならしむ。舳艫相啣み、黑煙を靡かして、我に向つて進み來る狀、何ぞそれ勇壯なるや。

艦數に於ては相匹敵し、戰艦及び十二吋主砲の數に於ては彼まさり、裝甲巡洋艦及び八吋砲の數に於ては我まされる





## 活劇　興廢



日露兩艦隊は、國家の安危をこの一戰に賭して、龍虎相搏つ一大活劇を茲に演ぜんとす。

一時四十分、旗艦三笠は敵の前路を扼せんがため、針路を變じて敵艦隊に向ひしが、この時檣頭高く、「皇國の興廢この一戰に在り、各員一層奮勵

努力

あわ。(周章)つ

努力せよ。」との信號飜りたり。全艦隊の諸士之を見て一人も周章つる者なく、肅然として靜かなること林の如し。

二時七分、敵まづ砲火を開き、盛んに砲彈を放てども、距離遠きに過ぎて、多くは海中に沒す。わが艦隊は滿を持して未だ發せず、烈しき敵の砲火に堪へて、前進を續くること大凡六分、こゝに於て旗艦三笠始めて砲火を開く。これよりわが隊は適當の位置を占むる毎に砲火を注ぎ、かくて幾日月待ちに待ちたる海戰の序幕は開かれぬ。



訓練

命中

勝敗の機

兩軍の砲煙は煤煙と相混じて海上をこめ、水中に落つる砲彈の水柱は空を衝き、西も東も轟々として耳も聾せんばかりなり。初陣の悲しさ、敵は氣や顚倒したりけん、或は訓練や足らざりけん、その砲彈多くは命中せず、わが僚艦の損害を受けたるものいと尠し。之に反して、わが各艦より擊ち出す砲彈は能く敵艦に命中し、その爆裂の爲に黑色の煤煙を揚ぐること數知れず。かくて二時四十分、彼我主力の第一戰に於て、勝敗の機は既に決せり。

三時十七分、わが第一戰隊は、全砲火を再び敵の主力

壯快を極め

孤立

艦隊の先頭に注ぎけるに、敵は針路を轉じてわが鋭鋒を避け、我は之を追うて更に砲火を注ぎ、その命中の狀壯快を極めたり。

これよりさき、敵艦オスラビヤは既に海戰の初期に於て火災を起し、聊か前部を海中に沒しつゝ、戰列を離るゝを見たり。さてこの第二回の激戰に於て、敵の艦隊は全く擊破せられ、三時二十三分、旗艦スワロフも亦大火災を起し、戰列を離れて孤立するに至れり。

## 一五　日本海海戰　その二

巡視

慶事

第二回の攻擊終りたる後、敵の主隊はいづれに行きしか、見渡すかぎり海上は砲煙と煤煙とに包まれ、暫し孤立したる旗艦の外、敵影を見ることを得ざりき。

この時、予は艦内を巡視せしに、兵員口を揃へて、「副長、御目出たう御座ります。」と述べたり。誠に然り、天下にかくの如き大慶事あらんや。さても祝辭の交換は單にこゝのみに止らず、上中甲板到る處皆然らざるはなし、恰もこれ歲旦の光景なり。

四時三十分、わが主戰隊はスワロフに砲火を集注しつゝ通過す。スワロフは既に半ば戰鬪力を失へる上

に、今又全砲火を浴びせ掛けられし事なれば、全艦忽ち黑煙に包まれ、火災熾んに起り、幾ばくもなく汽罐の破裂したるにや、黑煙蒸氣を交へて升騰す。その狀壯絶又凄絶。

壯絶又凄絶

意氣や

五時八分、わが驅逐艦がスワロフ攻擊のため突進するを認む。この不幸なる戰艦は全部黑煙に包まれたれども、尙砲彈の發射を絶たず、或は驅逐艦を防禦し、或は艦隊を砲擊して、飽くまでも抵抗す、その意氣や愛すべく、敵ながら歎稱するに堪へたり。

予が艦の砲擊を中止すると同時に、今はスワロフに

的中

天晴なる

只一つ殘れる十二听砲の一彈、わが前檣に的中し、破片司令塔に飛び入り、數人の死傷者を出せり。司令塔內に在りて、操舵に從事し居たる一等信號兵曹は、この彈片に右肩を貫かれしが、毫も屈する色なく、傍なる水雷長に向ひて、「わが右肩を見給はずや。」といふ。水雷長顧みてその右肩を探りしに、創口に指を沒する程の重傷にして、顏色既に蒼白となれるに、尙左手に舵柄を操つて艦の運動を過たしめず、交代者の來るを待ちて、始めて繃帶所に赴きしは、さても天晴なる働きぶりかな。

打撃

彷徨

捜索

かくてわが戰隊は、スワロフに大打撃を加へて過ぎ、轉回して再び之に向ひぬ。途中、二檣三煙突なる假裝巡洋艦ウラルの彷徨せるを認め、第一戰隊より全線の砲火を集注したれば、ウラルは忽ち大火災を起し、焔煙天を覆ふが中に、まづ一煙突倒れ、次に一檣失せ、引續きて第二檣より第二、第三煙突まで悉く壞れ去つて、後部より海中に沒し、間もなく沈み果てて、復船影を認めざるに至りぬ。その間僅に五分、沈沒したるは實に五時五十分なりき。

これより北方に向ひて敵の主隊を捜索せしに、偶〻ス



響導艦

天を燒く

ワロフの北西方に當つて四隻の敵艦を認む。二隻は稍近く、他の二隻は距離甚だ遠し。わが戰隊はまづ近き二隻に向つて進み、相竝びて砲火を交へ、逃ぐるを追うて戰ふこと大約一時間。七時十八分、敵の響導艦ボロヂノは後部に大火災を起して、火光天を燒く。時にわが旗艦三笠は針路を北方に變じ、他の諸艦も之に從ひ、富士針路を變ずる時、焔に包まれたるボロヂノに一彈を送りしに、爆裂して黑煙漲り升る、誠に見事なる命中なりき。續いて予が艦より砲火を注ぎしに、聊か前方に落ちたれば、予は距離を注意する中

目擊

今や遲し

に、ボロヂノ爆發したりと告ぐるものあり。見れば、唯黑煙を殘すのみにて、遂にその沈沒の狀を目擊することと能はざりき。以て如何に迅速にその海底に急ぎしかを知るに足るべし。これ恐らくは火藥庫の爆發に因りたるならん。時に七時二十三分。

七時二十五分、戰鬪中止の命ありて、わが戰隊は北上す、時に日漸く西に傾き、驅逐艦、水雷艇は敵艦の周圍に集り、各、攻擊の位置を擇び、今や遲しと期を待てるものの如し。

嗚呼二十七日に於ける吾等の戰は終りぬ。夕陽既に

視界

謙讓

天外に落ちて、視界漸く暗し。遙に南方を顧みれば、探照燈はこゝかしこに點ぜられ、砲聲殷々として遠雷を聞くが如し。これぞわが驅逐艦、水雷艇の攻擊に着手せしものと想はれたる。八時頃より十時頃までは砲聲を聞き得たれど、遠ざかるに從ひては、唯波の音のみ高かりき。

（掃露餘風）

## 一六　東鄕大將の片影

大將が傲岸にして屈せざるは、勇氣の溢るゝに因れども、その間別に仰ぐべき謙讓の德を有せり。今や戰

連戰連勝

へば必ず勝ち、擊てば必ず破り、連戰連勝の大功をたてながら、常にその功を天佑に歸して誇らざる所、實に名將の龜鑑と謂ふべし。

龜鑑

嘗て海軍の技師たりし某工學博士この頃某參謀を訪問して、「昨今新聞紙に鬼平八郎と呼ばれて、驍名の轟ける東郷司令長官は、十數年前、吳に於て參謀長たりし東郷氏と同人なるか。」と問ひければ、參謀は不思議のことを問ふ人かなと訝りながら、「勿論同人なり、貴下は何故かゝることを尋ねらるゝか。」と反問せり。

昨今

反問

博士曰く、「吾吳に居たる頃、多くの參謀長に使はれたるが、東郷參謀長ほどおとなしき人はあらざりき。世に鬼平八郎と稱せらるゝ東郷氏は容貌魁偉にして、音聲鐘の如き人と想はるゝに、わが知れる東郷氏は、溫和寡言、長者の風ある君子人なれば、同名異人にあらずやとて、問ひたるなり。」と答へ、感懷之を久しうせり。

長者

之を久しうせり。

（小笠原長生）

明治卅七年四月の作

## 一七　老船長

八十の大船つぎ〳〵に
宇品みなとを離れつゝ、

陸軍大將奥保鞏

大同江へぞ向ひける。
奥大將の乘りませる

根據地

海州灣は韓國黃海道の南岸にあり

八幡は、ひとり艦隊の
根據地さして進み入る。
海州灣頭、もや深く、
雨ふりそゝぐ夕まぐれ、

海軍大將東鄕平八郎

東鄕來ぬとふれられぬ。
くがのをさ訪ふ海のをさ、
めざすはおなじ仇なれど、
いさををさ
いさをはわかる、過去、未來。



あるじ。
いみじ。
まじり
おい。

ネルソンは十八世紀末頃のイギリスの海將

あはれ、この客、このあるじ、
いみじと思ふ群のうちに
とつくに人もまじりたり。
船に老いたる船長は、
もと英國のうまれにて、
ネルソン夢みる人なりき。
別れてかへる東鄕は、
雨にぬれつゝトラップに
立つ船長の手をとりぬ。
言葉はなくてやゝしばし

あはれ

越え（越ゆ）

その手放たぬ船長の
白き睫毛はぬれにけり。
あはれ、浮寢の夜の夢に、
ネルソンならで、今よりは
東郷をこそ見るならめ。

（森　鷗外）

## 一八　アルプス越

世界に名高きアルプスの險山、しかも北風凄じく吹き暴るゝ十一月の末ごろ、とても越えられずと、皆々が尻込するを、ナポレオンは叱り勵まし、是非とも越



運搬

はづ（外）し

機敏

けづ（削）れる

えよと、嚴令を下しければ、海拔一萬尺に近き大アルプスを越ゆる進軍は始れり。

中にも大砲の運搬は最も困難なれば、ナポレオン自らその任に當り、砲身は悉く取り外して、くりぬき筒に納め、人力を以て牽き上げさすることとせしが、時としては只一門を牽くにだに百人を要しぬ。砲架、車輪は皆取り外し荷なはせ、火藥、彈丸は函に納めて、騾馬に負はせたり。

用心はすべて細かく、處置はすべて機敏なりき。或時は、削れる如き崖ぎはの一筋路、一歩を誤りても底知

れぬ谷に陷る險阻を越え、又或時は、四面唯見上ぐるばかりの氷の屏風にて圍まれたる谷を涉り、千年も消えぬ雪を踏むなど、艱難言ふべからず。

然るにこれに處するナポレオンの指揮は悉く宜しきを得たりき。眞先には道案内者、長き杖にて雪を突き試みつゝ進み、次には路々の邪魔物、岩石、雪塊等を取り除きつゝ工兵進み、その次には究竟なる騎兵隊、最後には本陣。

骨を刳るが如き風、指も墮ちんほどの寒さにも怖れず、勵ましあうて進むうちに、怪しき物音こそ聞えけ

消え。（消ゆ。）
刳る。（刳ぐ）
聞え。（聞ゆ。）



れ。

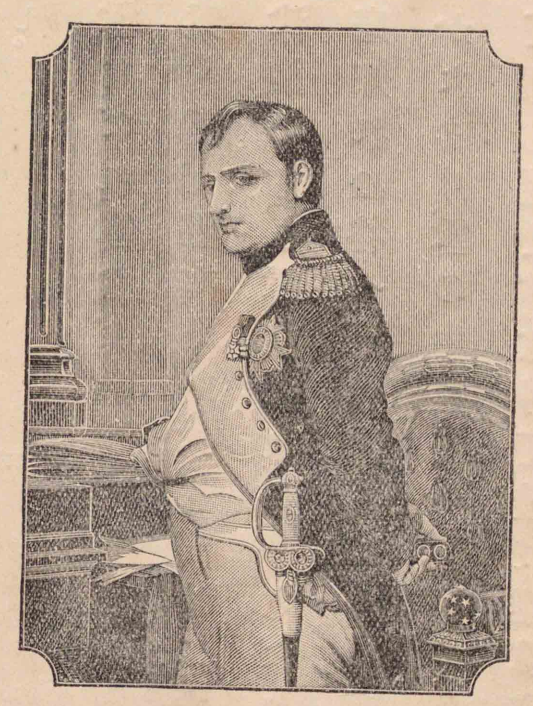
「雪なだれ、雪なだれ。」

案内者が聲高く叫ぶと同時に、山上より滑り墜つる津浪の如き雪なだれ。只一なだれに、騎兵凡そ三十人、底知れぬ谷へ滑り墜ちぬ。かくて眞黑なる人馬の一かたまり、雪の中にてやゝ暫くもがき居りしが、やがて何も見えずなりて、後は唯眞白に茫々漠々。

かやうなる事一度二度のみにあらず。一人の鼓手は辛うじて雪中より這ひ出でしが、あたりに人影見えず。救を呼ばんとて凍えたる手に撥を取り上げ、一心

こゑ。（聲）
見え。（見ゆ。）
凍え。（凍ゆ。）

に太鼓を打ち始めぬ。力なき響は哀に微かに聞えたれども、救ふべき道なし。或は又後列の谷へ滑り墜ちしを知らずして進む前列あり、前列の旋風にさらはるゝを見れども救ひ得ざる後列あり。



ナポレオン

アルプスの險阻を辿ること二週間。兵士の勇氣幾たびも衰へかけしを、大將ナポレオンは叱り勵まし、遂にこの進軍を成し遂げけり。「能はずとは愚人の辭書にのみ見ゆる語。」と罵りしナポレオンは、まことに勇猛果敢の人なりけり。

（坪内雄藏）

衰へ。（衰ふ。）

勇猛　果敢

## 一九　後方勤務

戰線にありて奮戰し、大功を樹つるものは、その名永く史上に貽るべし。されど峻坂を攀ぢ、激流を涉り、飛彈の下に危險を冒して、彈藥を補充し、糧食を運搬し、能く勇士をしてその攻擊を續けしむる後方勤務の

奮。

攀ぢ。（攀づ。）

補充

功も、亦決して戰線に立ちて銃を執るものに異ならざるなり。

奪。

奉天會戰の初、近衞師團は唐家屯附近一帶の高地に據れる數倍の大敵を攻撃し、三月四日、やうやく敵の第一陣地を奪へり。この陣地の防備は尤も急を要すれども、工具の不足と戰士の疲勞とは、作業をして意の如くならしめず、纔に雪を積んで壘を作りなどせり。顧みれば、後方一帶の平地は敵の瞰射を受くること最も急にして、人斃れ、馬傷つき、連絡全く絶えたるを以て、彈藥盡き、戰士飢ゑんとす。

斃、倒。絶え。飢ゑ。

已。

己。

倒、斃。

まづ。

この時に當りて、糧秣を駄馬に積み、遙に戰線に運搬すべき命を受けたるは、卽ち輸卒太田悅治なり。日已に暮れ、朔風面を打ち、飛雪紛々として咫尺を辨ぜず、馬惱み、己も將に凍えんとす。剩へ敵の射撃頗る烈しく、飛彈隙なく身邊に爆裂すれども、避くべき道なし。その歪頭山麓に至れる頃は、沍寒身に沁み、人馬共に氷上に滑り倒れて、また起つ能はざらんとす。然れども耳を掠むる砲聲に勇氣を鼓し、再び起つて荷を整へ、辛うじて戰線に達することを得たり。

着するや、まづ燈火を照らして檢すれば、鞍にも、馬に

も、己の被服にも、處々に彈痕を印し居たり。幸に人馬ともに創淺くして、終にその任務を全くし得たるが、この間の困苦は想像に餘あり。それ戰線の士いかに猛烈なりとも、かゝる勇敢なる後方勤務者のあるにあらずんば、焉んぞ克くその功を全くするを得んや。

（忠勇美譚）

きず。（創）
想像に餘あり
いづく（焉）んぞ

## 二〇　海濱より

御帰の後の消息如何小生頗る頑健大暑にめげず肉いよ〳〵肥えしまりて昨今は體量殆ど十七貫ろ十七貫ろと日々海水にてかくろひ鍛

肥え。



ひて既に十五日と相成候叩かば鏘として聲も出づべきこの鐵腕の堅さ黒さ今は大兄の前も憚るべくなくなりぬ熱沙の自然の土俵に一番もとれて見たく候

明後日は東京より從弟の来るべき筈にて富士登山を試みゆすべば直にこれを拉して富士登山を試みゆすべく御殿場より登りて吉田に降り三坂峠を越えて甲府に入り更に鰍澤に出でて船して富士川を下らんと存じ候はいかに大兄が去年の道程は冒險的小生が今年の計畫は遠

堅さ黒さ
たうげ（峠）

寧ろ
候はじかとまれ
贈(送)
自愛

征的興は均しかるべく趣は異なりその難は固より大兄の冒險なるに候べしその壯は寧ろ小生の遠征的なるには候はじかとまれ寄宿舍樓上互に豪興を語り合はん日言々風雲の氣を帶ぶべくや候はん

貝殼少々小包に託して贈り上げ候昨日小妹と渚小濱の砂清きところにあそびしに候山中なのづから霧多しと聞く冀はくは自愛し給へ不備

（青年書翰文）



濟んで(濟みて)
新しい(新しき)
かたぐ
自然
多い(多き)

## 二一　叡山の夏

第一學期の試驗も濟んで、夏休となつた。待ちかねた輩は、試驗の點が分ると、すぐ柳行李をしめて、新しい浴衣に着かへて、歸鄉の途に就く。僕は師たる洋人が避暑かたぐ植物採集をする手傳に賴まれて、七月の上旬、叡山に天幕生活をすることとなつた。

西洋人は夏になると一家相携へて、海に山に自然と親しんで、樂しくくらすものが多いが、中にも京阪神の洋人が好んで集る所は叡山だ。山の八合目あたり、

天幕
部落
覗いて（覗きて）
面白い（面白し）
胴籃

杉や樅の大木の間の勾配やゝ緩かな所に、杙をうち、板を渡して、ざつとした床をこしらへ、如何なる雨にも耐へる厚いゴムびきの天幕を張つて、こゝに暑季二箇月ばかりの間、起臥寢食するのである。夏の盛には、三百人からの人數が部落をなして、やはり天幕張の禮拜堂が出來、濃い翠の樹の間に、白い天幕がちらちら覗いて、オルガンや讃美歌の聲が清涼な山氣にのつて來るなどは、頗る面白い。

天氣の好い日には、柄長網を肩にして、蝶捕りに行つたり、また採集胴籃をさげて、叡山から果は鞍馬の邊



嗅いで（嗅ぎて）
包んだ（包みたる）

まで、珍しい羊齒や色々の植物をあさつたり、咽が渴けば、杉山の濕つぽい氣を嗅いで、古株の下に見出した苔清水に口を濕し、腹がすけば、杉ごけの上に脚投げ出して、古新聞に包んだサンドキッチに舌鼓をうつのである。あまり遠あるきして、鳥の聲にふと頭を上げると、きら〳〵と入日の光は木立を漏れ、谷を隔てた山又山は紫に烟つて居る。驚いて、いざと立ち還る、一足々々に谷は暮れ、山は靄が蒼くなる。あゝ困つたとふりあふぐ空に、うつすりと新月がかゝる、そのおぼつかない光をたよりに、幾山も越えて、眞黑の木の

面白い。（面白き。）
愉快

間に燈光を認めた時の嬉しさ。それから飯が濟むと、早速採集したものを乾燥紙に插んで、ねむくない時は、鉛筆で羊齒などの寫生をする。面白い職務だ、實に愉快な生活だ。

その内に友が來た。その夜は、僕の天幕に、一枚の毛布を二人して引つ張りながら、別れて後の無限の情を敍した。

明くる日、僕は帽をかぶり、友は傘をさして、延曆寺の裏を通り、杉林をぬけ、小笹を分けて登つた。友が息ぎれがするので、休み〳〵登つて、かの將門が純友と遙



休み〳〵

洛陽
だらう。（ならん。）
俯瞰圖
喘ぎ〳〵
つき〳〵
吸うた。（吸ひたり。）

に皇城を視下したといひ傳へる邊に來ると、洛陽の平原は一目の中にある。京都の町や、村や、寺を擁する森や、青田や、賀茂、桂の諸川や、それから遙に淀、山崎から、あれが大阪の方角だらうと思ふあたりまで、僕の指さす指頭に俯瞰圖を廣げた樣に見える。なほ少し上つて、とある樅林を彼方へ出ぬけると、忽ち脚下にきら〳〵と琵琶湖の半面が現れた。

「絶景！」と友は喘ぎ〳〵見とれる。僕も面一杯の汗を拭つて、大息をつき〳〵、高山の巔を繞るオゾーンを水の如くに吸うた。

岩を拂つて、曲りくねつた松の蔭に脚投げ出し、なほも滲み出る汗を拭つて、僕等は暫し言もなく絶景に見とれた。脚下の山又山は重なり重なつて、その下には半面の湖水が今まさに午後の日を一杯に受けて、鏡の如く光つて居る。湖を緣とるリボンよりも狹い平地の青いのが田で、出崎に一寸ばかり秀でたのが松で、煙があがつて居るのが大津、矢橋、坂本、堅田。北の大きな半面は、出張つた山に遮られて見えぬが、左手の比良と湖の向うの三上山は手招でも出來さうな。ちやうど今長濱通ひの小蒸氣が大津を出て行く。玩

青いのが（青きが）
出來さう

具程の船が絲ほどの煙を吐いて、鏡の上を滑つて行く。耳を澄ますと、蚊の樣な聲がする、汽笛の音であらう。

（德富蘆花）

吐いて（吐きて）
あらう（あらん）

## 二二　登山の益

晴は乍ち風雨となり、一日の旅程は二三日の滯在となり、想ひも到らざる困難に遇ひ、平地にて知りがたき疲勞を覺ゆ。これらは登山者の屢、經驗することにて、かゝる經驗は卽ち人をして耐忍の必要を感ぜしむ。敢爲の氣象は强固なる意志に伴なはざるべから

旅程
敢爲

ず、強固なる意志は耐忍を缺いて獨り立たざるなり。

諺に「かはいゝ子には旅させよ。」といふは、その意之を

あぢ（味）は。

して苦樂を味はゝしむるに在るなるべしといへど

如かず

も、寧ろ愛兒に登山を教ふるの適切なるに如かず。登

山は華美、虚飾等の念を去りて、粗衣に安んじ、粗食に

甘んじ、いかなる不自由にも耐ふる氣風を養成す。

外人がアルプスに登るや、多きは數十回、或は路を失

身を以て脱し

ひて半ばより降り、或は難に遇ひて辛うじて身を以

て脱したるが如きは、一々擧ぐるに堪へず。始めてア

モンブランは海拔一萬五千餘

ルプス山脈中の最高點モンブランの絶頂を窮めた

尺にして、わが富士山より高きこと凡そ三千尺

る佛蘭西の碩學ヅッソッシュール氏の如きは、二十六年

の間に、三十回の登山を企てて、悉く失敗し、尚屈せず

して順路を索め、やうやく一八八七年八月に至りて、

達するを得たり（達し得たり）

二日を費して、同伴者二人と共に絶頂に達するを得

たりといふ。十九世紀に當りて、歐米人が無比の發達

を遂げたるは、全くこの根の強さによれり。彼等は平

生の遊に山といふ武器を用ひて、その筋骨と意志と

を鍛錬せるなり。

就中

抑、本邦の山嶽はその高さアルプスに及ばざれども、

峻秀天を衝くもの諸國の界に相錯はる。就中、中央大

伯仲の間
起伏重疊
世態

山系を踏破せんとせば、山の波、雲の濤を凌ぎ、崖を傳ひ、淵に臨みて徑を求めざるべからず、その危險アルプスと伯仲の間に在り。且高山の樣、富士、筑波の如くひとり平野に聳ゆるものは一二に過ぎず。多くは起伏重疊して、一山を過ぐれば、又一山にかゝること、東家の屋梁を攀づれば、直に西戸の柱礎に接するが如し。御嶽の如き、立山の如き、乘鞍嶽の如き、白山の如き、皆然り。その最高點に立てる參謀本部の一等三角測量標は、「到着點こゝに在り。」と信號するに、登山の客は之を望みながら、容易に到ること能はず。世態亦かく

世路
こゝろあてに
ふじ。

の如し。されば登山によりて耐忍力を養へるものは、世路を渡るに當つて、その益を得ること果していかばかりぞや。

（日本山水論）

## 二三　山の歌

こゝろあてに見し白雲は麓にて、
おもはぬ空にはるゝ富士のね。

（村田春海）

ふじのねを木の間〳〵にかへりみて、
松のかげふむ浮島が原。

（香川景樹）

暁の霞のうへに大比叡の

山のたかねはあらはれにけり。　（木下李文）

磯松を今はなれたるあら鷲の
ゆくへに見ゆるえぞの遠山。　（落合直文）

## 二四　樺太境界劃定行　その一

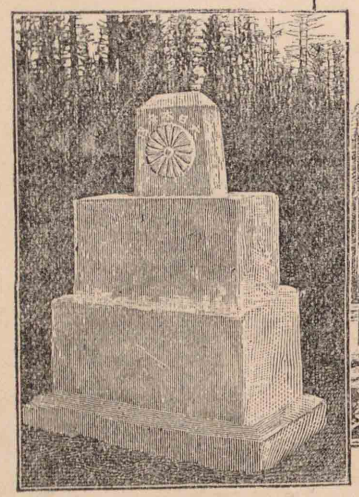
明治廿九年のこと　陸軍砲兵中佐渡邊岩之助

八月廿五日午前七時、馬に跨り、渡邊中佐と同行し、家僕、人夫等に寢具、食料など荷なはせて、露領グロデコオにある日本委員本部を出發した。樺太名物の霧は太初以來の樹々に凝りて、雫はぽたり〳〵と落ち、わが馬は幾度となく鬣を振るつた。やがて一里、ポロナイ川は森の絶間から霧をすかして現れた。

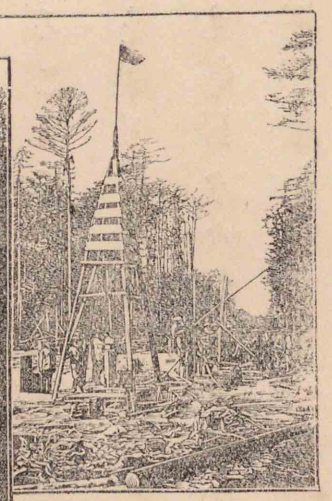




ポロナイ川の岸の第二天測點に達して、馬からおりると、此處には日本の石工が汗を拭ひつゝ、境界標石を刻つて居る。これは三州岡崎の北に產した甚だ堅い花崗石で、南面には日本領とて菊花の御紋章、北面には露國領とて雙頭の鷲を刻るのである。ちやうど



境界標石



林空作業

花崗石

その南面の菊花と「大日本帝國境界」の文字とが見事に刻り上つて居る。

石工小屋の西に、四個の天幕と白楊（どろ）の皮で葺いた小屋とが散在して居るのは、日本地形測圖班本部である。こゝにはひると、班長の中柴測量師が一露國委員と頻りに糧食の運搬に就いて談合して居る。何分にも毎日々々數百人分の糧食をば、開闢以來の密林と泥濘腰を沒する沼澤地とに運搬するのであるから、駄馬六十頭をわざ〳〵浦鹽斯德から呼び寄せたさすがの露人さへ、當惑の色を面に現して居る。ましてし

測圖班（一班）
陸地測量師中柴鰾三郎
泥濘
當惑の色を……現して居る（色は現れて）



人夫の背ばかりで運搬せうとする日本人の心勞は思ひやられる。

さて中柴班長竝にその部下は、毎日々々この密林と沼澤地と――蚊と蟆子（ぶと）とが雲霞の如く襲ひ來り、羚羊、馴鹿がさまよひ居り、雷鳥が手捕りにせられ、どこでも脚が深く埋まる處――を測量するのである。予は「御苦勞です。」と述べると、班長は笑つて、「毎日密林との搭闘です。」と答へた。密林との搭闘、實にこの一言は、北緯五十度附近の測圖作業の實際を言ひ盡して居る。

八時半に測圖班本部を出たが、此處よりさきは、徒歩

雲霞の如く
搭闘（品格）

沿（添）

偉觀

復と

の外に行かれねば、馬を返して、まづ林空に入つた。林空とは、北緯五十度の境界に沿うた林木をば、樺太全島を横ぎつて眞一文字に開鑿する、その樹の隧道である。この作業は、いはば幅二丈、長さ四十里の厚い板を鑿で一直線に切り通すので、その偉觀は、樺太境界劃定といふ日露戰役の最後の一幕を壯にするに足るといふべきものである。殊に林空の處々に、高さ七八間の三角柱形の大覘標が立ち、紅白の旗はひらひらとその頂上に飜り、旗を超えて遙の山が鏤めたやうに見えるなど、わが一代に復と眺められる景では

復もや

ないとめでた。

第一の林空を過ぎると、天俄に開けて、茫々たる沼澤地が現れた。元來沼澤地には、日本の內地はいふに及ばず、北海道でも、そこに生える植物は、葦か薄かの類である。然るに樺太中部以北の沼澤地には、「いそつゝじ」と白石楠とが一面に蔽ひ茂つて居る。なほ行く程に、沼澤地もやうやく過ぎて、落葉松（からまつ）、椴松（とど）、えぞ松の帶に入り、復もや林空の中に立つた。それが盡きると、流水の聲が聞え、水の邊に白楊の皮で葺いた小屋が七つ八つ殘つて居るのは、去る廿一日までこの地にあ

つた日本地形測圖班事務所である。一つの小屋に捕れたての鯇（あめます）五尾が白楊の葉に包んであつた。ちやうど十一時半だから、その一尾を炙らせて、晝食の菜とし、一同これを賞味した。

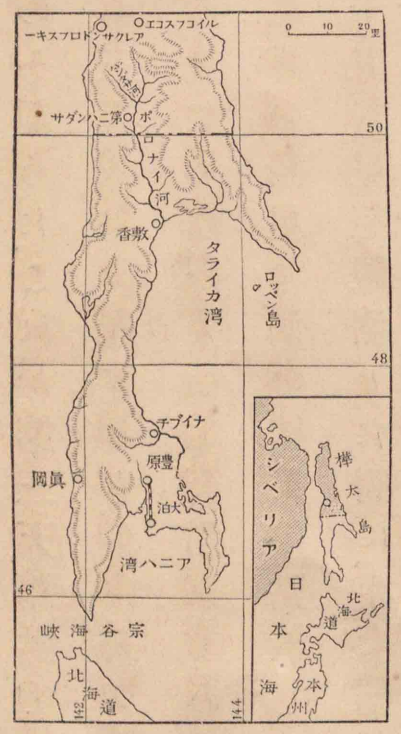
## 二五　樺太境界劃定行　その二

午後一時半、此處を出て、ハンダサ川の獨木橋を渡り、復林空に入つて、更に林空を出ると、沼澤地は復開け來り、例の如く高さ二三尺の植物が茵の如く連なり、その上に十間に一株、廿間に一株と、高さ三四間にも

復、亦

ほのほ（焰）
架けなほす

足らぬ落葉松がひよろ〳〵と立つて居る。それから復林空に入ると、さる卅一日以來の野火はまだ消えもせず、煙と焰とは處々に起り、草鞋の下は熱を覺える。燒け切れた電話線を架けなほす人夫に遭うて、予等の無事にこゝまで到着したことを、日本委員本部に電話で傳へさせ、やがて樹々の滴るやうな翠の間から、白い天幕がちら〳〵する



東京帝國大學理科大學助教授平山清次
囑託
陸地測量師山田竹彦
色は……現れて居る（色を現して）
久濶
永（長）

のを認めた、これが第三天測點である。時正に四時。第三天測點に達すると、平山天文囑託は天幕の内で餘念なく、露國委員で天測家であるアフマメチエフ參謀の對星精測の結果を點檢して居る。露國委員が十五對星を觀測した間に、平山囑託は山田測量師と共に四十五對星を觀測した程で、勤勉辛苦の色はその面に現れて居る。予等を白楊の皮で葺いた小屋に誘うて、久濶の情を敍せられた際には、如何にも氣の毒なと、覺えず涙ぐんだ。日本の社會は、今囘の樺太境界劃定に就いて、平山氏の姓名を永く記憶せねばならぬ。

翌廿六日、日露兩國の第三天測點精測の結果點檢全く了つて、境界劃定の事は決した。よつて露國參謀と平山、山田二氏の立會のもとに、境界木標を埋めることとなつた。青森縣の樵夫は傍の直徑一尺五寸一分の落葉松を伐り來り、露西亞兵は大きな方形の穴を掘つた。その掘方は日本人よりも早く且巧みであるが、穴を深くする爲に時間を要し、なか〳〵掘り上らぬ故に、暇潰しにと木標の木目を數へて見ると、約三百四十個あつた。卽ちこの落葉松は約三百四十歲の

潰（潰）
卽（乃則）

老木である。そこで予はつくづく考へた。

今その齢を數へて、ほゞこれに近い事實を見ると、その種がこの世に萌え上つた頃は、足利義昭が十五代の將軍となつた時である。この樹の一尺位に生長した頃には、秀吉が關白となり、この樹の五十歳の頃には、大阪は落城して豐臣氏も亡び、百歳の頃には、支那で明が亡びたが、この樹は彌增に生長し、遙に佛蘭西のナポレオン一世の誕生を聞いて、己亦二百年の誕生日を祝つた。後十年、松前藩士新井隆助は日本人として始めて樺太に入り、また十年、林子平は三國通覽

頃。（項）
誕生
また（又）、復、亦、



圖說を著して、樺太について「東韃靼の地續にして、東南海の一出崎なり。」と記し、更に二十年、間宮林藏は樺太からアジヤ大陸に渡つた。この樹の三百歳の頃は、今上天皇陛下が明治維新の大業を成就し給ひ、後四十年、陛下の御稜威は彌盛んに、樺太の半部を得給うて、今茲に日露兩國境界點の木標となつて、吾も亦聊か御役に立つたと、落葉松が老の心に喜んで居るであらう。

かやうに想像より想像を馳せて居ると、やうやく穴は掘り終つた。そこで件の木標を埋め、山田測量師は

陸。陸。
陸。陸。
御稜威
亦、復

標の南方に立ち、露國參謀は北方に立ち、握手して別れた。これで明治卅九年八月廿六日、日曜日の午後六時半、樺太、第二ハンダサに於て、日露戰役の最後の幕は閉ぢた。

（志賀重昂）

宇宙

## 二六　未知星ノ測定

宇宙ノ無邊ナルハ驚クニ堪ヘタリ。地球ハソノ中ノ一粟粒ナリ、人間ハ又ソノ上ノ微塵ナリ。サレドコノ微塵ノ身ヲ以テ、尙ヨク幾億萬里ノ外ヲモ測リ、宇宙ノ大ヲ算ヘ得ルハ、ソノ力更ニ驚クベキニアラズヤ。

始末。

海王星發見ノ始末ノ如キハ、人智ノ宇宙ト共ニ大ナルヲ證明ス。

距（去）

海王星ハ直徑一萬八千里ノ大星ニシテ、太陽ヲ距ルコト約十三億里ニアリ。地球ニ比スレバ、ソノ大イサハ五倍ニシテ、太陽トノ距離ハ實ニ三十倍ナリ。太陽ヲ距ルコト海王星ニ次ギテ遙ナルヲ天王星トス。海王星ノ未ダ發見セラレザリシ頃、天王星ノ軌道ハ常ニ豫測ニ反シ、歲月ヲ經ルニ從ウテ、豫測ト實際トノ差異ハ益〻大イナリキ。天文學者ハソノ理由ヲ知ルニ苦シミ、中ニハ、未知ノ星アリテ天王星ノ運行ニ影響

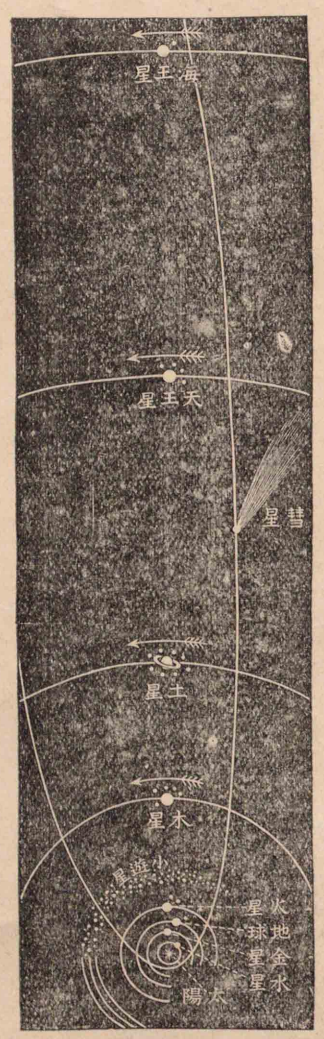
未。

差異

注目

チ及ボスニアラズヤト、想像スル者モアリキ。英人あだむす尙けんぶりっぢ大學ノ研究生タリシ時、コヽニ注目シテ、卒業後直ニソノ研究ニ着手シタリ。天體ノ研究トイヘバ、單ニ望遠鏡ノ觀測ニヨリテソノ軌道ヲ知ルコトト、思フモノアルベケレドモ、未知ノ天體ヲ測ルニハ、コノ法ノミニ依ルコト能ハズ。あだむすハ、マヅにゅーとんノ重力ノ原則ヲ基トシテ、天王星ノ軌道ヲ計算シ、之ト實際トノ差異ヲ見テ、モシコノ差異ノ因タルベキ天體アリトセバ、如何ナル性質ノモノナルベキカヲ考ヘ、苦心スルコト二年ニシテ、コノ問題ヲ解釋シ、ソノ結果ヲ同大學天文臺長ニ報告セリ。コレ西暦一八四五年九月ノ事ナリキ。同十月更ニ之ヲぐりにちヘ國立天文臺ノ在ル所ニシテ、地球經度ノ基本タル所ぐりにちヘ國立天文臺ノ在ル所ニシテ、地球經度ノ基本タル所聊カノ行違ノ爲ニ、臺長ハソノ儘ニ打捨テ置キタリ。』

解釋



太陽系ノ諸天體

然ルニふらんすニテハ、るべりえーモ亦單獨ニ同一ノ研究ヲ始メ、同年十一月、天王星ノ軌道ノ計算ト實

單獨ニ

符節ヲ合ハセ

歩ヲ進メ

際ト異ナル由ヲ、ふらんす大學院ニ報告シ、翌年六月、又あだむすト同一ナル結果ヲ報告セリ。ぐりにち天文臺長ハ之ヲ聞イテ、二人ノ報告ノ符節ヲ合ハセタルガ如キニ驚キ、コレヨリあだむすノ在職セルけんぶりっぢ大學ト共ニ、熱心ニ觀測ニ從事シ、遂ニコノ年八月ノ四日ト十二日トニ於テ、新星ヲ發見スルヲ得タリ。一方ニテハ、るべりえ―全ク之ヲ知ラズ、更ニ研究ノ歩ヲ進メテ、九月廿三日、亦新星ノ存在ヲ認メ、之ヲるべりえ―星ト名ヅケタリ。

英國ノ天文臺ハ、あだむすノ研究ヲるべりえ―ニ先

發表

暗合

毫釐

ダテリトシテ、之ヲ發表セシカバ、新星發見ノ前後ニツイテ、英佛兩國ノ間ニ激シキ爭論起レリ。サレドカレコレ何ノ關係モナク、全ク暗合ニ出デタルコト明カナルニ及ビテ、るべりえ―ノ名ヲ撤シ、海王星ノ名ニ改メタリトイフ。

カクノ如ク單ニ計算ニ據リテ、兩國ニテ、シカモ同時ニ、海王星ノ存在ハ確認セラレタルナリ。コノ一事ヲ以テモ、宇宙ノ法則ノ確乎不變ニシテ、毫釐モ差フコトナキヲ見ルベク、併セテ億萬里ノ彼方ニ隱レシ未知ノ天體ヲ測定シタル人智ノ恐ルベキヲ知ルベシ。

村是

調査

## 二七　田舍の生活

衣に織る絹、絲に紡ぐ綿、肉、蔬菜、家の柱、これらは悉く農民の産出するものにして、しかも農民は少しも奢ることなし。鳥取縣に於ける村是調査によれば、その農民の常食は米一升、麥七合の割にして、朝飯には屑米を餅の如くにして食すといひ、又神奈川縣中村の調査によれば、普通には米四、麥四、粟二の割合なりといふ。されど一般の農民の常食を見るに、この調査よりはなほ遙に低度にあるもの多きが如く、芋粥に腹

枚（枚）

依然として

贅澤

を膨れさせ、玉蜀黍に飢を凌ぐものの數、全國を通じて甚だ少からず。

衣服も亦然り。市人の絹を纏ふ今日、農民の間には、中等以上のものにても、婚嫁の時、男女共に名ばかりの絹衣裝一枚を作るに止るが多く、世の流行は幾たび變遷しても、その一枚の晴着は依然として式日に用ひらるゝなり。明治三十六年の神奈川縣豐田村の調査によれば、羽織は一人につき三枚、衣服は十枚、寢具は一枚に當れり。衣服の十枚の如き、やゝ贅澤に聞ゆべけれど、仕事服二枚、浴衣一枚、單衣二枚、袷三枚、シャツ

に至つては

僻遠

二枚にて、既に十枚に達せずや。寢具の一人一枚に至つてはいかに、その苦樂を察せよ。思ふに一村の中には、富豪もあり、多くの衣類を所有するものもあるべければ、貧者には一枚の着替だになきものあるべし。特にこの村は中央の大都會に近く、開化の度もやゝ高かるべければ、僻遠の地に至つては、その狀想ひやるべし。

都會の賤民の裏長屋に比ぶれば、農民の住居は誇るに足る値あり。鳥取縣湖山村の調査によれば、その村民、中農以上は二十坪以上の建坪に住み、小農といへども十坪を下るものなし。これによりて一般の田舍を推し得べくば、都會の家屋に比べて、その廣きこと知るべきなり。よしや又むさくるしく、膝を容るゝに足らざるものありとも、屋外は山高く水清く、飾るに草あり、木ありて、天地はおのづからなる農民の天地なり。

おのづからなる

住家に於ける爐は一段の趣あるものなり。農家の爐は面積割合に廣く、丸薪、割木の類を燃し、上より自在鍵を吊り、大いなる藥鑵を掛くるを常とす。湯を沸かし、暖を取り、これを續りて、老いたるも、幼きも、家内の

吊（弔）

何くれとなく

ものも、近所のものも、中よく何くれとなく物語る樂しさよ。

余嘗て奥羽に旅行し、行き暮れて、ある農家に一夜の宿を借りたることあり。例の爐邊に坐して、稗飯、味噌汁の馳走に舌うちぬ。やがて老婆は小兒を伴なうて爐の一角に坐し、亭主と七八町隔りたる隣家の亭主とは余の向う側に踞し、傍の煤けたる二枚屏風に、すきまもなきまで貼り附けたる錦繪を指さして、かれやこれやと、昔の風、他國の噂など話し合ひ、余に近頃の東京の様など尋ねて、一同愉快に一日の勞を慰め

亭主

かれやこれやと



若しそれ

ぬ。

その後なほ諸方の田舍の住居を視て、爐の勢力の大いなることを知れり。若しそれ煙ぬきを完全にして、衞生に注意し、屏風、柱、壁などに地圖、繪畫を貼り附けて、澁茶一碗、他鄕の風俗を語り、偉人の逸事を談じ、また耕織の事業を評せしめんか。一日の勞を癒し、樂のうちに益を享くること、いかばかりぞや。

評せしめんか

衣服よりも、飲食よりも、人は住居によりて感化を受け易し。廣き天地に住むものは、氣おのづから廣く、小事に拘らざるなり。田園生活なるかな。（田舍之日本）

田園生活なるかな

## 二八　英人の運動

英人の運動を好むは、殆どその天性にして、青天の下、技を磨き體を錬るは、その生活の主要部分なりとも稱すべし。運動の種類少からざれども、最も盛んなるはフット=ボールとクリッケットとにして、前者は秋より春にかけ、後者は春より夏にかけて行はる。青年學生はいふに及ばず、老若男女等しく之を弄び、是により等(齊)て社會上下の差別を少くすとさへいふ。クリッケットの如き陸上運動の競技會には、大英國は固より、その諸

遠近を問はず
臨(望)
曾、嘗、

植民地よりも選手を出し、選手は途の遠近を問はずして來り會すれば、こゝに全大英帝國の競技は演ぜらる。獨り選手のみならず、觀技者も亦世界の端々より遙なる山海を越えて場に臨む。競技始れば、肩を張り拳を握りて、之を視ること畢世の大事業に異ならず。曾て嬉戲の風なく、熱心の極、沈靜となり、悲愴に至るものあり。ある外國人は評して、「英人は悲しみて運動をなす。」といへり。

ボートの競漕にて最も有名なるは、オクスフォード大學とケンブリッヂ大學との間に行はるゝものにして、

喧傳

その勝敗は電報によりて即時に世界各國に傳へらる。他の諸國にもこの遊戯は盛んに行はるゝに、この二大學の競漕のみかく喧傳するは、まことにその謂れあり。他國にては、概ね專門の運動家を雇ひ入れて學生とし、之を選手として大捷を得んと計り、或は賄賂を對手に贈りて、勝を讓らしむるなど、卑劣の行少からず。獨りかの二大學は一切かゝる不潔の事なく、單に實力によりて相爭ふ。これ普く世界に注目せらるゝ所以にして、「米國はその無限の富を以てさへ、わがボートレースを購ふを得ず。」とは、英人が自負の言

專門

自負



なり。

剛健

英人は又馬を好む。馬はよく人の性質を識別する獸にして、勇敢なる者には服從し、卑怯なる者は弄びて之を苦しむ。詐欺と卑怯とを人間の最大恥辱とする英人が、之を愛し之を御するは、剛健の氣を養ふ所以なりとするは、當然のことなり。從うて競馬の技も亦極めて盛んにして、良馬の多きこと他國に比なし。

趣味

凡そ佛人と英人との運動の趣味を對比するに、彼は自轉車、自動車の類を驅使するを好み、此は體力、腕力、又は脚力を用ふる競爭を行ふ。佛人は英人を嘲りて、

彼は……此は

利器
嘗、曾
慘狀
攀。(擧)

數百年前の舊習を守りて、文明の利器を應用することを知らずと笑ひ、英人は、筋骨を鍊らざるものは、眞の運動にあらずとす。嘗てパリーの劇場火を失して、婦人の多く燒死せしことあり。英人之を評して、「佛人若し平生身體を鍛ひ置かば、かゝる危難に際して、必ずまづ婦人を場外に助け出して、かくまでの慘狀には至らしめざりしならんに。」といひあへりとぞ。

かくの如く英人は筋骨を鍊ることを重んずれば、又甚だ旅行を好む。或はアルプスの高嶺を攀ぢて千秋の氷を踏み、或はナイルの河畔をさまよひ、パレスタインの靈地に詣でて、太古の文明を懷ひ、或はノルウェーの北、夏季に日沒を知らざる所を尋ね、或は輕裝して世界を一周す。その足跡天下に遍きこと、この國民の如きは稀なるべし。

英人は普通の旅行を以て足れりとせず、又冒險の遠征を好み、或は蠻人の襲擊を意とせずして未知の地を探り、或は荒原遠く銃を提げて虎狩、獅子狩をなす。今の英國皇帝の皇太子たりし時、インドにて虎を狩りて、自ら之を射とめられしが如き、他國には類多からざれども、英國にては高貴の人もかゝる冒險を企

錬磨

つること少からず。近來機械の發明は日に〳〵筋骨錬磨の機會を少くすれば、別に方法を講ぜずば、何によりてか雄壯敢爲の風を養はん。人間の氣力は常に身體の强弱に伴なふ、英國民をして世界に闊歩するに至らしめたる堅忍不撓の精神は、その運動を好む習慣が生みたるものにあらずや。

方法を講ず

堅忍不撓

習慣

新體國語教本　卷三　終


明治四十一年九月廿八日　印刷
明治四十一年十月二日　發行
明治四十一年十二月十日　訂正再版印刷
明治四十一年十二月十五日　訂正再版發行

新體國語教本
每卷賣價金貳拾五錢

著作者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　藤岡作太郎
發行者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　西野虎吉
印刷者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　野村宗十郎
發行所　開成館　【振替貯金口座】東京第五參貳貳番
販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎
販賣所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　三木佐助



著作權所有
著者　檢印
不許漢譯


（株式會社東京築地活版製造所印刷）

金澤市尼寺町二丁目五人
高橋與八郎

150

# 新刊

## 國語教科叢書

**********

| | | |
|---|---|---|
| 文學博士 藤岡作太郎著 新體 國語教本 | 全十冊 | 各冊金貳拾五錢 |
| 文學博士 金澤庄三郎著 日本文法教本 | 全四冊 | 各冊金貳拾錢 |
| 文學博士 金澤庄三郎著 日本文法教本別記 | 全一冊 | 定價金貳拾錢 |
| 文學博士 新村出編 普通教育 國語綴字法 | 全一冊 | 定價金貳拾錢 |
| 文學博士 大槻文彥著 普通教育 日本文典 | 全三冊 | 各冊金貳拾五錢 |
| 文學博士 藤岡作太郎著 新體 日本文法教科書 | 全四冊 | 首卷金貳拾錢 上下續卷各冊金貳拾五錢 |
| 文學博士 藤岡作太郎著 新體 日本文學史教科書 | 全一冊 | 定價金四拾五錢 |
| 開成館編 日高秩父書 明治習字帖 | 全三冊 | 各冊金拾八錢 |